

ごあいさつ

気仙沼市長
菅原 茂



東日本大震災において、本市では1,246名の方が亡くなられ、内220名の方が今もお行方不明のまま、加えて109名の方が関連死と認定されました。犠牲になられた皆様に改めて心より哀悼の誠を捧げたいと思います。

2011年3月11日14時46分、誰にとっても人生最大の揺れ、全ての市民が津波を予感したあの瞬間、その数十分後には誰も予想出来なかったほどの大津波が襲来、地球が活動体であること、そのエネルギーの恐ろしさをまざまざと見せつけられました。

夜を通して陸も海も燃え続け、プロパンボンベの爆発？ミサイルが飛んで来るような音が頻発。翌朝には破壊され変わり果てたまち、川、海がSF映画のシーンのように広がり、全ての色が抜け落ちてしまったような光景と化しました。

そして人工の光が全くなり地上が真っ暗闇となった12日の夜、いつか砂漠の国で見た、降るような満天の星、綺麗だけれど、これから歩む道が果てしなく困難なものになることを教えてくれました。

私の記憶に鮮明に残るのは各地域の停電が概ね回復、避難所にも小さな安定が見え始めた4月7日、

大きな余震が発生、またもや全市一斉停電となりました。

歓声と拍手で久々の照明の点灯に大きな喜びと小さな希望を見出したのもつかの間、全ての市民の皆さんが再び絶望の底に追い落とされることになりました。絶望が諦めに変わる事がないよう、一刻も早い停電の復旧を祈っていましたが、幸い同日中に全面復旧、心底救われた思いでした。

そしてその時、私はこれからもこのようなことは何度も起こる、その度に落ち込むことなく気を取り直して進むしかないという2度目の覚悟を決め、三歩進んで二歩下がる、それが復興だと思い決めました。その頃、「百折不撓」との書をいただきました。今も市長室に貼っており、しばしば眺めては気持ちの確認をしています。

大震災発生から10年、気仙沼市民の皆さんは家族や親しい人々を失った深い悲しみを抱きつつ、幾多の壁にぶつかり、何度も希望を失いかけても、決して諦めることなく、行政が頼りなく見えても、ただひたすらに、そして真摯に復興を目指し努力を続けてきました。進み具合や道筋はそれぞれであっても、市民の皆さんの遅く誇るべきその姿に心より敬意を表したいと思います。

本市ではこれまで、大震災後の災害対応や復旧の段階における記録を残すため、『東日本大震災における災害対応の記録と検証』、『東日本大震災災害対応記録集』の二つの資料をまとめてきました。

その後の復興段階においては、あらゆる分野で膨大な事業が繰り広げられてきましたが、本誌では行政における復興事業を中心に民間の足取りにも触れながらその展開を記録し、後世に伝えるべく編纂を行なってきました。

この10年、全国、全世界から数えきれないほどのご支援を頂戴してきましたが、お世話になった皆様にも是非ご覧いただき、もしもの場合に少しでもお役に立てればと思います。

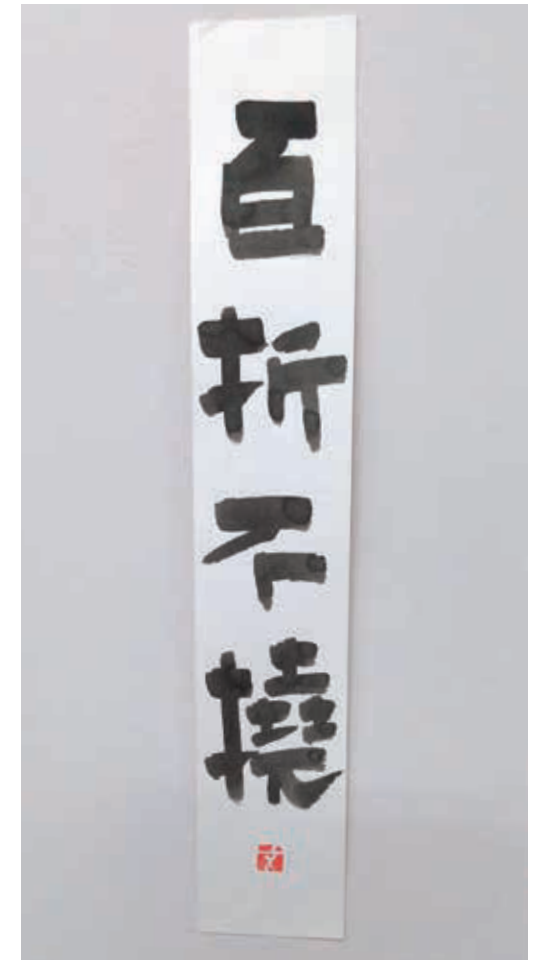
東日本大震災という歴史上我が国最大級の災害からの復旧・復興においては、政府にこれまでに無い大きな決断を幾つもしていただきました。莫大な復興費用を賄うため、25年間に亘る全国の個人・法人に対する増税の敢行、復興庁の創設、公有財産の復旧に留まらない産業や暮らしまでを含む復興施策、私有財産の復旧への公費の投入など、今では当たり前を受け取られる復興の基礎はどれもかつては常識ではありませんでした。政府のリーダーシップに改めて心から感謝を申し上げます。

膨大な復旧・復興事業の過程において沢山の方々に気仙沼市に来ていただき私たちと一緒に汗を流していただきました。被災直後のボランティアの皆さん、NPO・NGOや企業として支援をいただいた皆さん、地区住民の相談に乗り、復興事業との仲を取り持っていたいただいた大学の先生・生徒の皆さん、本当にお世話になりました。

そして、本市職員として慣れない土地で不自由な生活をしながら各事業の最前線で夜遅くまで勤務いただいた全国の自治体からの派遣職員の皆さんと送り出していただいた各自治体幹部の皆様には、改めて、市民を代表して御礼を申し上げます。是非、気仙沼市

を第二の故郷として感じていただき、復興の姿を、また、その先の姿をこれからも見に来ていただければと思います。

結びに、この記録誌に記されている膨大な事業の中心となって使命感を持って取り組み続けてきたのは、他ならぬ本市の職員とOBの方々です。その公務員魂と郷土愛に満ちた奮闘に心から敬意を表し、記録誌巻頭のご挨拶とさせていただきます。



発刊に寄せて

気仙沼市議会議長
菅原 清喜



さんていらいち
「3.11」。

3月11日が様々な思いを込めてそう呼ばれるようになってから、10年が経過いたしました。

犠牲になられた皆様の御冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

あの日、我々は市議会定例会の予算審査特別委員会で、平成23年度の予算を審査していました。これまで経験したことのない強い、長い揺れに、ただごとではないと思いましたが、大津波が家を、人を、ふるさとを呑み込み、それまでの日常が一瞬で奪われるなど、誰が想像できたでしょうか。

中断した議会を再開し、何とか全議員の半数となる15名の議員を集め、予算を成立させたのは、3日後の14日のことでした。

本市議会においては、早期復旧及び復興に関する調査を行うとともに、議会と当局との情報の共有化を一層図るため、平成23年5月に「東日本大震災調査特別委員会」を設置するとともに、全国・東北・県等各市議会議長会を通じた要望活動など、復興の加速化と被災者支援、新しいまちづくりに向けた取り組みを進めてきました。

これまで進められた、膨大な数の復興事業。新しい魚市場が建てられ、大島には橋がかかり、三陸沿岸道路の市内全線が開通いたしました。いずれも本市にとって歴史的な事業です。

それらは、市民の皆様が押し潰されそうな不安と悲しみに向き合い、未来のために歯を食いしばり、困難を乗り越えて歩んで来られた成果であります。

気仙沼市職員の皆様が、自らも被災しながら、郷土の復旧・復興のため、昼夜の区別なく奮闘した成果であります。

また、ボランティアの皆様や全国の自治体、企業、大学、各種団体、さらには海外の皆様が、震災直後から物心両面にわたり、多大なるご支援をくださったおかげであります。

この復興に携わられました全ての皆様に、深甚なる敬意と心からの感謝を申し上げます。

結びに、本誌が、未来の震災を知らない世代にも、貴重な資料として役立つことをご期待申し上げます。

想いを胸に 未来に向かって

衆議院議員
小野寺 五典



2011年3月11日 私たちにとって忘れられない、そして決して忘れてはならない日となりました。

震災の翌日、折り重なる瓦礫の中を、行けるところまで足を運び目にした光景。

悔しさのあまり大きな溜息とともに出た言葉は一つだけ。「なんだっけ……」※

あれから、10年が経過致しました。

この間、世界各国そして日本全国大変多くの方々から、物心両面にわたるご支援ご協力を賜り、我が故郷は復興の歩みを着実にすすめてきました。

また、私自身も行く先々で数多くの方からお話を伺いながら、山積する課題解決に向け、全力で取り組んでまいりました。

ただ何よりも、今ある復興を前進させたのは、地域の皆様、行政や各機関それぞれが震災の影響で大変困難な状況にありながらも、故郷を再生したい、気仙沼の未来を守りたいという同じ想いを一つに、実に多くの時間を費やし、地道で懸命な活動やご理解ご協力を頂いてきた事に他なりません。

ここに、復興に携わられた方々、ご支援ご協力を賜りましたすべての皆様に深甚なる敬意を表し、衷心より厚く感謝を申し上げます。

魚市場が復活しカツオの水揚げを遂げたあの日。馴染みの店が再建を果たし、大きな笑い声があちらこちらで聞こえた瞬間。

公営住宅が完成し、涙ながらに安心したと、ぎゅっと握られたおばあさんの手の温もり。「がんばっぺ」と力強く掛け合った別れ際の言葉。

それぞれが、思い描いた復興10年。それぞれが戦いながら歩んできた10年。

語り尽くせない程の悲しみや苦しみ、喜びや感謝。そして、震災で犠牲になられた方々への変わらぬ想い。

私たちはこれからも決して忘れる事無く、震災で得た多くの教訓や想いを胸に未来に向かっていくことでしよう。

1000年に一度という東日本大震災。

私もこの時代に生かされ、そして、この時代の政治家としての責任と使命感を更に強く持ち続けながら、あの日の光景とともに抱いた決意を尚一層深く心に刻み、これからも故郷の再生の為、そして笑顔溢れる我が国の未来の為、誠心誠意力を尽くしてまいります。

多くの方の想いを胸に……

※「なんだっけ……」：気仙沼はじめ宮城県北の方言で、「なんということだ……」という嘆息を表す言葉。

気仙沼をデッカくしましょう!

サンドウィッチマン(写真左)
伊達 みきお

もはや、第2の故郷になった気仙沼市。
いつも『おかえり!』って言ってくださるのが嬉しいです。

普段から『気仙沼』と大きく書いてある帆布バックを使い、サメ革製の財布を使っているの…毎日、気仙沼に触れています(笑)

10年だからどうのとかではなく…これからも気仙沼の沢山ある魅力を発信して参りますので、その1つの手段として…どうぞ我々サンドウィッチマンを使って下さい。

内湾のオシャレな建物や、大島に架かる素敵橋も完成し、益々魅力的な港町になりましたね。

気仙沼が大好きです。

生島さん、気仙沼ちゃん、渡辺謙さん、熊谷育美ちゃん…皆さんと一緒に、更に気仙沼を大事に盛り上げて行きたいです。

あっ!気仙沼のスター☆マギー審司さんもですね!マギーさんの耳の様に、気仙沼をデッカくしましょう!また、胃袋を満たしに気仙沼へ行きます!

復興以上の町を目指して

サンドウィッチマン(写真右)
富澤 たけし

東日本大震災から10年が経ちます。

あらためてお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り致します。

気仙沼でロケ中に被災してからは、高校時代に一度しか行ったことなかった気仙沼に何度も行かせてもらい、今ではみなと気仙沼大使もやらせて頂くようになりました。

建物は直せても、心の傷はなかなか癒えるものではありません。

そんな傷を隠しながら、いつも笑顔で迎えてくれる気仙沼の人々には感謝でいっぱいです。

あんなに辛い出来事は無ければ一番良かったです

が、震災をきっかけに気仙沼に行く度に人や食べ物に触れて町の良さを知り、全国の人にも行ってもらいたくなります。

今では全国で多くの方が気仙沼という字を読めるし、町があるのを知っています。

できることなら気仙沼の魅力を発信し続けて、世界から人が来てもらえるような、復興以上の町を目指してもらいたいです。

また遊びに行った時は、まだ知らない気仙沼を教えてください!

魚と酒は苦手だけど。



火災が続く気仙沼湾(2011年3月12日 安波山より)